

第4部 笑顔を求めて



【18】 (題字は柴山抱海氏)

国、地方の財政事情が厳しさを増す中、社会全体のセーフティネットにはころびが目立つようになった。わたしたちの命綱である医療・福祉分野も例外ではなく、満足な社会保障が受けられない人も少なくない。医療・福祉の現場で笑顔は不可欠だ。苦境にあっても一筋の光明を見いだそうと模索を続ける人々に迫る。

(文中・敬称略)

がんになったからこるが、お茶を飲みながら出会えた縁を大事にする世間話の方が圧倒的に多そうだった。「ここ」は家族的な雰囲気。大丁目内の「スマイルサロン米子」には毎週木曜の午後、がん患者が集まり闘病体験を話し合う。最近ではDVDで医療知識も学んでいる。

① 支え合うがん患者「スマイルサロン米子」



世間話で盛り上がる音田(中央)ら。サロンには笑い声が絶えない。米子市車尾4丁目の米子医療センター

きな声で話せば気分も変わる。誰かがそう言つと、皆がうなずいた。

■笑顔の理由

サロン世話人の音田八千代(64)は米子市道

笑町4丁目でも5年前だった。08年5月に米子市内に乳がんを手術。しかし「退職記念でがんになった」とあつけらかんと言つてのける。病気にまつわるきわどい話題でも、お互い笑い話にしてしまつ。「気兼ねなく話せるように心掛けています。初めての人の話はなるべく聞くようにしている」と配慮も怠らない。

サロンができたのは2007年1月。鳥取県内で1号だった。音田が世話役を引き継いだのは今春。開設をリードした井上三千子(47歳)がことし3月に47歳で亡くなったからだ。

井上は乳がん患者の全国組織「あけぼの会」鳥取支部代表を務め、啓発活動に奔走。サロンでは頼もしい相談役その人柄をしのんだ。

「生きる意味」今年のフェスタでは、井上のメモリアルコーナーが設けられた。サロンで使ったピンク色のエプロン、自作の植物画、メッセージ……。サロン参加者もその人柄をしのんだ。

話せば気分変わる

「彼女を支えてもらったと言つてくださる方は多いけど、お互いさまだった」と、百谷はしみじみと語る。障害者活動を通じて出会った高校時代、井上は控えめな印象が強かった。「いつから度胸がついたのかな」。発病、ボランティア活動を通じ、多くの出会いから得た経験が大きかったのだと実感している。

医療費の支払いに生活の不安……。ほとんどの患者は発病して初めて現実と直面する。サロンの意義は、体験者から助言が受けられることにある。

音田も告知で「死」を意識せざるを得なくなったと認める。しかし、がんの「敷居」は確実に低くなっている。「まだ準備する時間はある。自分を意識して生きられる長がある」と強調した。